スラヴ民衆英雄叙事詩研究序説

栗　原　成　郎

はじめに

スラヴ民族の口承叙事詩の重要な特徴を成しているものは，歴史的現実の芸術的普遍化と独自の典型化である。スラヴ英雄叙事詩は民衆の口承文芸の作品であり，そこに史実的信憑性やなにかの歴史的事件の記録を求めるべき性格のものではない。民衆英雄叙事詩には民衆の関心や志向に共鳴する理念が芸術的なイメージにつつまれて反映されている。そこには歴史的諸事件に関する民衆的理解が刻印されている。それと並んでスラヴの民衆叙事詩には古代の余韻があり，より古い時代の民衆の世界観の痕跡が見られる。民衆英雄叙事詩の英雄たちの人物形象には異教的伝説や古代スラヴ神話に遡源する特徴がしばしば見られる。同時にまた，民衆英雄叙事詩にはより後代の現象が付加要素として存在し，しかもそれらが歌の中核を成している場合が見出される。民衆英雄叙事詩は民衆的環境の中に数世代・数世紀にわたって生きつづけたものであるために，当然ながら，そこには革新が生じ，部分的な変更が加わるのである。

スラヴ民衆英雄叙事詩の研究は内的比較の視点の導入を必要とする。ここでは民衆英雄叙事詩における英雄像の形成の具体的考察の一例として南スラヴ叙事詩の英雄マルコ王子の人物形象を取り上げてみたい。マルコは南スラヴ諸民族に共通の叙事詩的英雄だからである。

I　歴史のマルコと叙事詩のマルコ

1　セルビア・クロアティア民衆叙事詩におけるマルコ・クラリェヴィチ

マルコ・クラリェヴィチMarko Kraljević はセルビア・クロアティア民衆叙事詩における最も人気のある，かつ最も論議を呼んだ英雄である。

歴史のマルコ・クラリェヴィチは中世セルビアの南部の一地方の統治者（1371－1395）である。ヴカシン・ムルニャヴチュヴィチVukašin Mrnjavčević（1366－1371）の子。ヴカシンはセルビア帝王ステファン・ドゥーシャンStefan Dušanに仕えた軍司令官であったが，ステファン・ドゥーシャンの死後，帝位継承者であるステファンの子ウロシュ Uroš の帝位を簒奪し，1367年自らセルビア王であると宣言した。結局，ヴカシンはネマーニャ王朝最後の王ウロシュ（1355－1371）とセルビアを共同統治することとなったが，そのさい，ヴカシンの子マルコは《 Mladi kralj 》「小王」の称号を受けた。父王ヴカシンがハドリヤノポリス近くのマリツァ河畔におけるトルコとの戦い（1371年）で戦死したのち，マルコはプリレップ Prilep を首都とする縮小された領土（マケドニア地方）を相続し，王位に就いたが，オスマン・トルコの家臣（vazal）として貢納と従軍の義務を課せられ，きわめて困難な条件のもとに統治者となった。1395年スルタン・バヤズィトに従軍し，ワラキアのミルチェタMirčeta公の軍隊と戦い，ロヴィネRovine(ルーマニア南西部のロヴィナリ）で戦死した。オスマン・トルコの家臣としてのマルコの実際の身分は不明な点が多いが，自治を認められた領内においてはかなり強力な支配者であったらしい。彼は自分の肖像と「神なるキリストに対する信仰において祝福されたる王マルコ」“ Въ Христа Бога благовѣрни Краль Марко ”という銘を刻んだ銀貨を鋳造させたほどの自立性を保っていた。しかしマルコ王の自立性がスルタンの軍としてコソヴォの戦い（1389年）に参戦することを拒むことができるほどのものであったとは考えにくい。マルコ王の支配領域がコソヴォ平原と境を接していたにもかかわらず，コソヴォの戦いとの関係において彼の名が史料においても叙事詩においても言及されていないのは奇妙である。しかしマルコ王の現実的な歴史的状況は，盗賊や隣接する封建領主たちの攻撃におびやかされていたスルタンの領地において社会秩序を保つ大黒柱として登場するマルコ・クラリ

ェヴィチの歌群の中に最もよく反映されていると思われる。

マルコ王に関する最初の記録された伝説はステファン・ラザーレヴィチ公Despot Stefan Lazarevićの死（1427年）後まもないころ書かれた“哲学者”コンスタンティンKonstantin Filosofの『ステファン・ラザーレヴィチ公の生涯』の中に見出される[1]。コンスタンティン・フィロゾフは，マルコ王が身はオスマン・トルコに隷属するものでありながら，精神的には独立の英雄であったことを伝えている。マルコ王は，彼の領地の東側に隣接する領地の支配者で，不本意ながらトルコに臣従していた親友コンスタンティン・デヤノヴィチ．Konstantin Dejanović に，ロヴィネの戦いの前夜，キリスト教徒の勝利を祈願する遺言を托したという。コンスタンティン・デヤノヴィチもマルコ王とともに討死した。コンスタンティン・フィロゾフが「引用」するところによれば，「たとえ私がこの戦いにおいて最初に戦死すべき身であったとしても，神がキリスト教徒たちを助けたもうことを言い残し，またそのように祈る」。

叙事詩のマルコ・クラリェヴィチの絶対的な人気と栄光に対して歴史上のマルコ王の実像は対応しない。マルコ・クラリェヴィチは叙事詩の英雄であって，歴史の英雄ではない。叙事詩の英雄としてのマルコは1547年のスプリット市のヴェネツィア元老院への公的報告書にはじめてあらわれる。ひとりの盲目の兵士がスプリットの街頭でマルコ・クラリェヴィチについての歌をうたい，聴衆がそれに唱和したという。伝存の最古のマルコの歌『マルコ・クラリェヴィチとその弟アンドリヤシュ』（1555年）もダルマティア地方で採録されている。これについては後述するが，マルコ歌圏の古層に属する歌はマルコ・クラリェヴィチの反トルコ抗戦を前面に出していない。

マルコ・クラリェヴィチには叙事詩の一般的テーマ，国際的テーマが結びついている。超自然的な存在（ヴィーラたち）との友好的な関係と戦闘，黒い戦士たち（トルコ人の集合的形象）との決闘，婚礼，死などのテーマがそれであ

る。英雄叙事詩はマルコを脆弱なウロシュ王の保護者としてうたい，またオスマン・トルコの家臣，イスラム教君主（スルタン）の“posinak”（義息）としてしばしば君主を助ける活躍ぶり，主君が彼を恐れる様子をうたう。マルコは貧しき者たちの保護者であり，法の守り手である。彼の義兄弟となるのはミロシュ・オビリッチ Miloš Obilić，パザルのレーリャRelja od Pazara，ベグ・コスタディンbeg Kostadinである。彼の敵はムーサ・ケセジャMusa Kesedžija，フィリップ・マジャリンFilip Madžarin，コストゥルのミナMina od Kostura，リュティツァ・ボグダンLjutica Bogdan，トルコ人，アラビア人である。

民間信仰によれば，マルコ・クラリェヴィチは3世紀以上も生き，死んだのではなく眠っているのであり，一定の時に再び現れるという。

マルコ・クラリェヴィチについては散文の伝承が数多くある。マルコの誕生，怪力の天授，駿馬シャラッツの獲得，死などについては散文で伝えられることが多い。たとえばマルコの愛馬シャラッツ Šaracの伝承がそうである。シャラッツ（“šaren”「まだらの」馬の意）は特殊な性格と起源をもつ神話的な馬である。ある伝承によれば，マルコはシャラッツをあるヴィーラ（妖精）からもらった。そのためにシャラッツは翼あるヴィーラのラヴィヨイラRavijojlaに追いつく能力をもつ。別な伝承によれば，馬喰から疥癬病みの仔馬を，力が強いのを見込んで買ったという。シャラッツはトルコ語をさえ話し，ワインを飲み，涙を流し，主人の死を予感する。シャラッツは英雄の馬の特徴として国際的なモチーフをもつ。

2　ブルガリア民衆叙事詩におけるクラリ・マルコ

ブルガリア民衆英雄叙事詩は基本的にはブルガリアの封建制時代とオスマン

・トルコのブルガリア征服後の最初の数十年間に民衆によって作られたものである。しかし今日まで伝承されている歌の圧倒的大多数は14世紀から15世紀にかけて成立したものであり，その大部分はブルガリア民族の歴史における悲劇的な出来事 — 1393年から1396年にかけてのオスマン・トルコの侵略によるブルガリア帝国の崩壊とその後の長期にわたるオスマン支配に対するブルガリア人民の抵抗 — を反映している。ブルガリアの歴史における14世紀末から15世紀初頭にかけての事件の悲劇性，ブルガリア民族の苦難の深刻さと精神的衝撃の激しさ，異教徒の残虐性などの歴史的契機がブルガリア民衆叙事詩を発達させる要因となった。中世の英雄たちの武勲を讃えたより古い歌の層が近代のトルコ支配の暴虐とそれに抵抗する英雄たちをうたったより新しい歌の層を圧迫し，押し退け，あるいはより古い歌がより新しい歌と融合して，変質・変形して行き，その過程において漸次いくつかの叙事詩的英雄群をめぐるいわゆる「歌圏」が形成された。このために，英雄叙事詩には即座には説明しがたいアナクロニズムが生じるのである。

なぜマルコがセルビア・クロアティア民衆叙事詩のみならずブルガリア民衆叙事詩の中心的な英雄の形象となったのか，この問題については今日なお明快な解答は得られていない。

ブルガリア民衆叙事詩においてはふつうマルコは“ Крали ”「王」の称号（セルビア・クロアティア民衆叙事詩ではつねに“Kraljević”「王子」）と領主の身分をもつ英雄として登場するが、そのことを除いては史的マルコの原型を反映しているところはほとんどない。民衆の歌い手はクラリ・マルコにまったく新しい特徴を付加し，しばしば異教的な伝説から借用された多種多様な主題をクラリ・マルコの名にあてはめた。叙事詩のマルコ像は民衆の自由への止むに止まれぬ渇望によって生れた英雄の理想像である。

ブルガリアの叙事詩のクラリ・マルコの出自についてはいくつかの異同が見

られる。

(1) ヴルカシン（ Вълкашин — セルビアではヴカシンVukašin）王とモムチル将軍の妹エフローシナ Ефросина（ある歌ではアンゲリナ Ангелина）のあいだに生れた長子。セルビア・クロアティア民衆叙事詩ではマルコの母の名はイェヴローシマJevrosimaである。マルコの母の名は，それらのいずれにせよ，英雄の妹を示す常套的叙事詩人名である。史的マルコの母の名はイェレナ Jelena である。叙事詩のマルコは母方の伯父に英雄をもつことになるが，これも叙事詩の常套手段である。マルコの英雄的な性格は伯父譲りということになる。マルコの父ヴルカシン（ヴカシン）王と英雄モムチルの妹エフローシナ（イェヴロシマ）との結婚はモムチルの不貞の妻の裏切りを契機として成立する。『ヴルカシン王，モムチルの妻を殺す』（ БНТ，т. 1 ）においてはヴルカシン王の求愛を受けたモムチルの妻は，ヴルカシンに夫を殺させるために，夫の天馬の翼を焼き，夫の剣が鞘から抜けないようにはんだづけにする。ヴルカシン王はモムチル将軍を狩に誘い出して殺害を謀る。ヴルカシン王の狩の獲物が自分であることと妻の裏切りを知ったモムチルは自分の城に逃げ帰るが，城門が閉ざされている。モムチルは妹のアンゲリナに助けを求めるが，アンゲリナは義姉に欺かれ，後髪を柱に縛りつけられていて身動きができない。しかし妹は頭髪がもぎ取れるまで体を前に引っ張って脱出し，兄のために亜麻布を城壁から垂らした。モムチルは亜麻布を摑んで壁を登り，もうひと息で城壁を越えるところまできた時に，妻が走ってきて布を切った。城壁の外に落ちたモムチルにヴルカシン王が襲いかかる。モムチルは剣の鞘を払うことができない。モムチル将軍はヴルカシン王に，裏切り者の妻を殺し，妹を娶るように遺言する。これと同じ主題の歌はセルビア・クロアティア民衆叙事詩にもある（『ヴカシン王の婚礼』，Karadžić，t. II，No. 24）。この歌の出来事は史実に合致せず，英雄マルコの系譜を示

すためにつくられたもので，マルコがすでに叙事詩の人気のある英雄になってから形成されたものである。

(2) マルコはヴァルダル河 Вардар の子，すなわち水神の子であり，ヴァルダル河の岸の砂の中で幼年期を過した。

(3) マルコはヴルカシン王と妖精とのあいだに出来た子である。セルビア・クロアティア民衆叙事詩にも同じ伝承がある。

(4) マルコは龍の子であり，変身自在の妖術師である。セルビアでも同様にマルコは龍の子（zmajev sin）とうたわれる。

(5) マルコは単なる農民の子であるが，彼に乳房をふくませた妖精によって超自然的な力を得た。そのためマルコは妖精の娘と義理の兄妹の関係にはいる。セルビア・クロアティアにも同様の民間伝承がある。

3 セルビア・クロアティア民衆叙事詩とブルガリア民衆叙事詩における英雄像の相異

セルビア・クロアティア民衆叙事詩においてはクラリュヴィチ・マルコ（マルコ王子）はセルビアの英雄であり，ブルガリア民衆叙事詩においてはクラリ・マルコ（マルコ王）はブルガリアの英雄である。史的マルコはすでに述べたようにプリレップを都とするマケドニアの封建領主であったが，ブルガリアの民衆の意識においてはマケドニア地方はブルガリア帝国領であり，マルコ王はブルガリア人であった。近世ブルガリアの最初の歴史家パイシイ・ヒレンダルスキ（1722－73）は『スラヴ・ブルガリア史』（1762）においてヴルカシン王もその子マルコ王子もともにブルガリア人であると見なしている。ブルガリアの学者たちもマルコ＝ブルガリア人説に傾き，マルコの使用言語はセルビア語ではなく，ブルガリア語であった，と考えている[2]。

セルビア・クロアティア民衆叙事詩のマルコとブルガリア民衆叙事詩のマルコとを比較すれば，両者のあいだには，非常に大きな類似性があるにもかかわらず，深刻な相異があることがわかる。

ブルガリア民族は，他のバルカン民族以上に長くトルコ支配のもとに苦難を体験したために，マルコがスルタンの史実な家臣であるような歌を創作しなかった。セルビア・クロアティア民衆叙事詩においてはクラリュヴィチ・マルコは勇猛であるにもかかわらず，トルコのスルタンの史実な家臣，スルタンの意志の実現者であるが，ブルガリアの歌にはこの側面は見られない。ブルガリア民衆叙事詩におけるマルコは真理と正義の味方であり，辱められた者，迫害された者を護るためにいつでも立ち上がれる備えがあり，隷属状態に置かれた者を解放し，イスラム教の圧迫に抗して正教の信仰を保護する。

ブルガリア民衆叙事詩『マルコ王子とムサ・ケセジヤ』（《Кралевити Марко и Муса Кеседжия》，БНТ，т. 1，с. 236-242）とセルビア・クロアティア民衆叙事詩『マルコ王子とムサ・ケセジヤ』（《Marko Kraljević i Musa Kesedžija》，Vuk II，№ 66）とを比較すると，ブルガリアの歌においてはマルコはブルガリア皇帝シシマンの家臣であるが，セルビアの歌ではマルコはトルコのスルタンの家臣である。総じて，セルビア・クロアティア民衆叙事詩においてはトルコの要素あるいはトルコ的傾向がブルガリア民衆叙事詩におけるよりも強くあらわれている。さらに，セルビア・クロアティア民衆叙事詩におけるマルコは封建領主の性格の特徴を多く備えていて，ブルガリア民衆叙事詩におけるマルコほど民主的な性格の持主ではないこと指摘することができる。

以下，「マルコ歌圏」からいくつかの歌を選び，それらの比較検討によって，民族解放の希望に応える英雄，民衆の力の擬人化であるマルコ像の形成を見ていくことにする。

II　兄弟殺し ― 『マルコ・クラリェヴィチとその弟アンドリヤシュ』のバラード

マルコ・クラリェヴィチを主人公とする最初の民衆叙事詩はフヴァル島 Hvar 出身のダルマティアの詩人ペタル・ヘクトロヴィチ Petar Hektrović (1487－1572) の詩集『漁と漁師の会話』《 Ribanje i ribarsko prigovaranje 》(Venezia, 1558, str. 13-16) に収録された『クラリェヴィチ・マルコとその弟アンドリヤシュ』《Kraljević Marko i brat mu Andrijaš 》である。ヘクトロヴィチはこの歌をフヴァル島の漁夫パスコイェ・デベリャ Paskoje Debelja とニコラ・ゼート Nikola Zet の二人の吟唱から採録した。テクストの言語は16世紀のフヴァル島の方言である「チャ方言」(čakavski) のうちの「イ方言」(ikavski) である。詩型は当時アドリア海沿岸地方で歌われていた " bugarština " (ブガルシュティツァ) と呼ばれる15音節ないし16音節から成る長い詩型で, " guslarska pesma " (グスレの伴奏により歌われる叙事詩) と呼ばれるよりポピュラーな10音節詩型 (deseterac) と区別される[3]。bugarštica は18世紀にはもはや歌われなくなった。

マルコ・クラリェヴィチの歌の最初の採録が16世紀の半ばにアドリア海沿岸で行われたという事実は, マルコの歌がそれよりも早い時期に成立し, しかもその成立領域がマルコ王子の領土に近いセルビアの中部および南部であったという推論を可能にする。

『クラリェヴィチ・マルコとその弟アンドリヤシュ』は分捕り品の分配をめぐる兄弟の諍いと兄弟殺しという国際的なフォークロア・テーマが発達し, 合体した作品である。

このバラードの導入法は, 出来事をいくつかのレベルに置いて示す入り組んだ成層的な " slovenska antiteza"「スラヴ的対照法」(スラヴ民衆詩歌の導入部

に用いられる否定対句法）による。

最初の層は情緒的な性格をもち，歌い手は“siromah”「不幸者」を話題とし，共感をもってうたう。 —

Dva mi sta siromaha dugo vrime drugovala,
lipo ti sta drugovala i lipo se dragovala,
lipo plinke dilila i lipo se razdiljala,
i razdiliv se opet se sazivala.

二人の不幸者がずっと仲よく暮らしてきた
二人は仲がよく，慈しみ合っていた
戦利品は公平に平等に分け合った
別れては，また声をかけ合った。

「不幸者」とは運命と起るべき事件から見て不幸な，悲劇的人物を指し示す。

第二層は，歴史的な事件を語り，トルコに抵抗する義賊（ハイドゥク）の略奪と戦利品の分配についての現実的な語りに移行する。

V Već mi nigda zarobiše tri junacke dobre konje dva siromaha
tere sta dva konjica mnogo lipo razdilila.
O tretjega ne mogoše junaci se pogoditi,
negli su se razgnjivala i mnogo se sapsovala.

しかしある日二人の不幸者は三頭の勇士にふさわしい良馬を分捕った
そして二人は二頭の馬を平等に分けた

だが三頭目のことでは折り合いがつかなかった
二人は互いに腹を立て，さんざん罵り合った。

第三層においては前提が否定されるが，すでに語られた事柄をどんでん返しするスラヴ的対照法の技法により二人の人物の個性が開示される。

Ono to mi ne bihu, družino, dva siromaha,
da jedno mi biše vitez Marko Kraljeviću,
vitez Marko Kraljeviću i brajen mu Andrijašu, mladi vitezi.

それは仲睦じい二人の不幸者ではなかった
その一人は騎士マルコ・クラリェヴィチだった
騎士マルコ・クラリェヴィチ，もう一人はその弟若き騎士アンドリヤシュ。

Tuj si Marko potarže svitlu sablju pozlaćenu
i udari Andrijaša brajena u sardašce.
On mi ranjen prionu za njegovu desnu ruku
tere knezu Marku po tihora besijaše:

そこでマルコは輝く黄金の剣を抜き，
弟アンドリヤシュの胸を刺した。
弟は深手を負い，兄の右手にすがりつき
静かにマルコ公に語りかけた。 —

Jeda mi te mogu, mili brate, umoliti,
nemojo to mi vaditi sabljice iz sardašca, mili brajene,

dokle ti ne naručam do dvi i do tri beside.
Kada dojdeš, kneže Marko, k našoj majci junačkoj,
nemoj to joj, ja te molim, kriva dila učiniti,
i moj dil ćeš podati, kneže Marko, našoj majci,
zašto si ga nigdar veće od mene ne dočeka.
Ako li te bude mila majka uprašati, veteže Marko:
Što mi ti je, sinko, sbljica sva karvava?,
nemoj to joj, mili brate, sve istinu kazovati
ni naju majku nikako zlovoljiti,
da reci to ovako našoj majci junačkoj:
Susrite me, mila majko, jedan tihi jelenčac,
koji mi se ne hti sa drumka ukloniti, junačka majko,
ni on meni, mila majko, ni ja njemu.
I tuj stavši potargoh moju sablju junačku
i udarih tihoga jelenka u sardašce,
i kada ja pogledah onoga tiha jelenka,
gdi se htiše na drumku s dušicom razdiliti,
vide mi ga milo biše kako mojega brajena,
tihoga jelenka,
i da bi mi na povrate, ne bih ti ga zagubio.
I kada te jošće bude naju majka uprašati:
Da gdi ti je, kneže Marko, tvoj brajen Andrijašu?,
ne reci mi našoj majci istine po ništore;
ostao je, reci, junak, mila majko, u tujoj zemlji,
iz koje se ne može od milin'ja odiliti

Andrijašu;

onde mi je obljubio jednu gizdavu devojku.

I odkle je junak tuj devojku obljubio,

nikad veće nije pošal sa mnome vojevati,

i sa mnome nije veće ni plinka razdilio.

Ona t' mu je dala mnoga bil'ja nepoznana

i onoga vinca junaku od zabitja,

gizdava devojka.

Li uskori mu se hoćeš, mila majko, nadijati.

A kad na te napadu gusari u carnoj gori,

nemoj to se prid njimi, mili brate, pripadnuti,

da iz glasa poklikni brajena Andrijaša.

Bud da me ćeš zaman, brate, pri potribi klikovati,

kada mi te začuju moje ime klikujući

kleti gusari,

taj čas će se od tebe junaci razbignuti,

kako su se vasdakrat, brajene, razbigovali.

kada su te začuli moje ime klikovati;

a neka da ti vidi tvoja ljubima družina,

koji me si tvoga brata brez krivine zagubio!

いとしい兄さん，今生の別れにひとつお願いがあります

兄さん，僕の胸から剣を抜かないでください

二，三言葉を言い残すまで。

マルコ公よ，僕ら勇士の母のもとに帰ったとき，

お願いですから，母さんに悪い事を伝えないでください。

そしてマルコ公よ，母さんに僕の分け前を渡してください

母さんは僕からの贈物を二度と受け取ることはないのですから。

騎士マルコよ，もし母さんが兄さんに

息子よ，お前の剣が血塗られているのはなぜですか，と尋ねたら，

兄さん，母さんに本当のことを一部始終話してはいけません

母さんの気を動転させるようなことは決してしないでください

僕ら勇士の母にはこう話してください —

母さん，私は一頭のおとなしい小鹿に出会いました

その小鹿は，母さん，私に道を譲ろうとしないのです

向うは向う，こちらはこちらで，ともに譲りません

私は我を忘れて自分の勇士の剣の鞘をはらい

おとなしい小鹿の心臓を刺しました

そのおとなしい小鹿を見ると，

路上でまさに息を引き取ろうとしています

そのとき私にはこの小鹿が自分の血を分けた弟のように

いとおしく思えたのです。

もし二度とこのようなことがあったら，私は小鹿を殺しはしないでしょう。

また次に母さんが，マルコ公よ，

お前の弟のアンドリヤシュはどこにいるの，と尋ねたら，

母さんに本当のことはなにも話してはいけません

こう言いなさい — 母さん，勇士は異境の地にとどまって，

そこの魅力に取り憑かれ，そこを離れることができないのです

アンドリヤシュは —

異邦の美しい娘と恋におちたのです。

かの勇士は異邦を愛して以来，もはや

私と一緒に戦に出かけることもなく，

私と戦利品を分け合うこともしなくなりました。

娘は彼に見たことも聞いたこともない薬草をいろいろ与え

そしてその美しい娘は —

勇士にかの忘却の酒を飲ませたのです

しかし，いとしい母さん，まもなく彼に会えますよ，と。 —

そして，暗い森の中で山賊どもがあなたを襲うとき，

いとしい兄さん，彼らの前におじけてはなりません

大声を張り上げてあなたの弟アンドリヤシュの名を呼びなさい

たとえ，まさかの時に私の名を虚しく呼んだとしても，

あなたが私の名を呼ぶのを彼ら —

呪われた山賊どもが

聞いたなら，猛者どもは蜘蛛の子を散らしたように逃げ去るでしょう

いつでも兄さんが私の名を呼ぶのを

聞いて，彼らが逃げて行ったように。

しかしあなたの愛する仲間たちには

あなたの弟である私を，罪もないのに，殺した者が誰であるかを知らせなさい。

以上のようにこのバラードの大半を占めるのは，マルコの弟アンドリヤシュの長いモノローグである。アンドリヤシュ王子は金色に輝く兄の剣を胸に受けたまま，死を前にして澄みきった意識だけの世界に移り，その静謐の中で「おとなしい小鹿」と「忘却の薬草酒」の神秘的な寓意詩を物語る。

“dva siromaha”（二人の不幸者）のリフレインは“kleti gusari”（呪われ

た山賊ども）のリフレインに呼応して，義賊（ハイドゥク）としての戦闘に明け暮れる生活の残酷さについての弟の兄に対する切々たる警告に至るまでのすべての詩行に余韻を残している。「私の名を呼ぶ兄さんの声を聞いて山賊どもは逃げ出すだろう」と瀕死の弟は言う。アンドリヤシュは精神と名誉においてマルコに勝る騎士として描かれ，死後もマルコの保護者となろうとする配慮を示すが，マルコを“siromah”（不幸者）として生きつづけることを余儀なくさせる。―「しかしあなたの愛する仲間たちには／あなたの弟である私を，罪もないのに，殺した者が誰であるかを知らせなさい」

弟殺しの主人公，悔悟者としてのマルコ・クラリェヴィチはこの歌では副次的な人物にすぎない。

この歌の最初において二人の貧しい兄弟は無法者の山賊の騎士（vitezi）として描かれるが，良馬の分配をめぐる激しい争いを契機にしてスラヴ民衆叙事詩の対照法に特徴的な否定的方向転換によってより高い社会的身分が与えられ，マルコ王子とアンドリヤシュ王子であることが判るように描かれる。この詩の展開において重要な役割を果しているのは，名馬をめぐる争いのモチーフである。完全武装した騎士を乗せて走ることのできる“良馬”は封建領主の権力と彼の君主に対する忠誠のシンボルであった。14世紀の半ばに成立した『ステファン・ドゥーシャン法典』（《Zakonik Cara Stefana Dušana》）の第48条には「貴人が死去した場合には，その良馬と武器とは皇帝に返却されなければならない」と規定されている。名馬は英雄の付属物として叙事詩の常套形式となる。このように，マルコ，アンドリヤシュ兄弟は14世紀の封建領主の特徴をもつ一方において，トルコ支配のもとに義賊となり，分捕り品を生活の資として家族のあいだで分配する16世紀の無法者の性格を示す。

「おとなしい鹿」の寓意物語は，古代のバルカンにおいて神聖な動物として豊作祈願のため犠牲にされた鹿の崇祀の伝説の名残をとどめているものと思われる。

『マルコ・クラリェヴィチとその弟アンドリヤシュ』の歌は，その外的構造と内的構造の完璧さ，スタイル技法の調和，国際的バラード・テーマと歴史的人物との結びつきによって，16世紀のセルビア・クロアティア民衆叙事詩の最も完成された作品の一つとなっている。

歴史のマルコにはアンドリヤ Andrija（アンドリヤシュ Andrejaš はそのヴァリアント，ほかにAndrej，Andrejaなどの形がある）という弟がいたことが知られている。歴史のアンドリヤはマルコよりも長生きしたことが15世紀初頭の史料に言及されている。

マケドニアの民衆詩歌ではマルコの弟の名はふつうマリンコMarinkoであり，Andrijaは稀である。

セルビア・クロアティア民衆叙事詩にはマルコ・クラリェヴィチの弟捜しをテーマにしたものがあり，トルコ人に捕虜として連れ去られた弟アンドリヤをマルコが捜索し，救出するという筋立ての，いくつかのヴァリアントをもつ歌がある。

アンドリヤ王子の死をテーマにしたものには，他にコトル湾のリサンで採録された『アンドリア，居酒屋で死す』がある。その歌ではマルコとアンドリヤが断食競争をやり，飢えと渇きを我慢したマルコが勝つが，アンドリヤは喉の渇きに耐えきれずに居酒屋に行き，そこでトルコ人に殺され，マルコが弟の仇を討つ。

III　叙事詩的怪物 ― 『マルコ・クラリェヴィチとムサ・ケセジヤ』の歌

前述のようにこの主題はセルビア・クロアティア民衆叙事詩とブルガリア民衆叙事詩に共通のものであるので，両者を比較することによってそれぞれの特徴を見ることにする。

1　セルビア・クロアティア民衆叙事詩の『マルコ・クラリェヴィチとムサ・ケセジヤ』

ヴーク・カラジッチが1815年春スレームスキイ・カルロフツィにおいてヘルツェゴヴィナのガツコ出身のグスラール（語り手）ポドゥルゴヴィチ　T. Podrugović から聞いた『マルコ・クラリェヴィチとムサ・ケセジヤ』（Vuk Karadžić II, № 66）はマルコの決闘をテーマとした叙事詩のうち最も完成度の高い歌の一つである。

歌の梗概は次のごとくである。―

アルバニア人ムサ・ケセジヤはイスタンブールのスルタンに仕えて9年になるが，期待どおりの報酬がもらえないのを恨み，海沿いの地に戻り，船着き場と街道〔イスタンブールに富をもたらす商業路を意味する〕を閉鎖し，海のほとりに塔を築き，その下に鉄の絞首台をつくり，スルタンの臣民を誰彼の区別なく処刑した。スルタンは宰相チュープリリッチを3千の兵とともにムサ討伐に向わせたが，討伐隊は殲滅され，宰相は馬の腹に縛りつけられてスルタンのもとに送り返される。

その後も多くの勇士がムサ征伐に向ったが，誰ひとり生きて帰る者はいなかった。困りはてたスルタンは，宰相の忠告に従い，3年間地下牢にほうりこま

れていたマルコ・クラリェヴィチを逆賊討伐に起用する。マルコは4か月静養ののち，9年間乾燥させたみずきの材木を右手で握りしめ，木が二つ三つに折れて水が2滴したたり落ちたのを見て，自分の体力が回復したと判断して，ムサを討つために海沿いの地に向う。

マルコは刀鍛冶ノヴァクに金貨30枚を与えて剣を作らせる。ノヴァクは名剣を鍛えた。しかしマルコは，ノヴァクがムサのためにもっと切れ味のよい剣をつくったことを知り，怒って刀工の右手を肩の付け根から切り落とす。マルコは刀を作ることができなくなったノヴァクに余生を送るための金貨 100枚を残して，海沿いの地へと向う。

ある朝早く，マルコはカチャニク峡谷〔Kačanik — コソヴォとマケドニアの境目にある峡谷で，トルコ時代には隊商を襲撃する追剝の出没する場所として知られた〕の山道でムサで出会い，決闘にいたる。二人は槍を投げ，剣で斬り合い，鎚矛を振うが，武器は折れ，草の上で組み討ちとなる。闘いは決着がつかず，陽が中天にかかってもなお続くが，ついにマルコはムサに組み敷かれ，大声で妖精に助けを求める。妖精は雲の上からマルコに「お前の秘密の蛇はどこにいる」“Dje su tebe guje iz potaje?”と言う〔隠し持っている懐剣を使えとの暗示〕。ムサが妖精の声がどこから聞えてくるのかと空を見上げた隙に，マルコは懐剣を抜いてムサの腹から喉までを切り裂いた。

ムサの胸には三対の肋があり，その下に三つの心臓があった。一つの心臓はもう動かなくなっていたが，二つ目の心臓は激しく鼓動し，三つ目の心臓の上には毒蛇が眠っていた。毒蛇が目を覚ますと，ムサの屍体がはねまわった。毒蛇はマルコに「ムサが生きているうちにわたしが目を覚ましたら，今ごろは三百の災いがお前にふりかかっていただろう」と言う。それを見て，マルコは「悲しいかな，神よ，憐れみたまえ／自分より強い男を殺した我を」と涙する。それからマルコはムサの首を落してシャラッツの飼い葉袋に入れ，イスタンブー

ルに凱旋する。マルコがムサの首をスルタンの前に投げ出すと，スルタンは恐れてとび上がるが，三荷の財宝をマルコに与える。マルコはプリレップの町に帰還し，ムサはカチニャクの山峡に眠る。

この歌における三つの心臓を持つ怪物ムサ・ケセジヤ Musa Kesedžijaはオスマン・トルコ帝国に少なからず存在したスルタンの政敵あるいは分離主義者を抽象化した形象である。ふつう二人の歴史上の人物がその原型として推定される。1）スルタン・バヤズィトの末息子（15世紀初頭）で兄メフメドと帝位を争った Musa 。このムサ討伐の戦い（1413年）にはステファン・ラザーレヴィチ，ジュラジ・ブランコヴィチなどのセルビア諸侯も参加した。ケセジヤkesedžija (ćesedžija) はトルコ語 kesici「斬る者」よりの借用語で「追剝，盗賊」の意味である。2） Musa Albanasaアルバニアのムサ，アルバニアの国民的英雄スカンデルベグに仕えた軍司令官 Moiseje Arianit Musaka 。 一時スルタン側についたが，同族を討つことができず，後悔してスカンデルベグのもとに帰り，トルコ軍と戦い捕虜となった。1464年スルタンの命により生皮を剝がされて処刑された。

ムサ討伐を命じられた宰相チュープリリッチ Ćuprilić-vezirは，その原型として17－18世紀にオスマン帝国内に存在したアルバニアのチュープリリッチ家出身の何人かの宰相を考えることができるが，ここでは叙事詩的人物にすぎない。

この歌ではまる3年間地下牢にほうりこまれていたマルコが逆賊討伐に起用される。歴史上のマルコがスルタンの獄に繋がれていたという事実は知られていないが，出獄した英雄が国難を救うのは典型的な叙事詩的モチーフである。

2　ブルガリア民衆叙事詩の『マルコ王子とムサ・ケセジヤ』

マルコとムサ・ケセジヤとの決闘を主題としたブルガリアの民衆叙事詩にはいくつかのヴァリアントがあるが，ムサに組み敷かれたマルコが妖精（サモヴィーラ）の忠告に従い，懐剣を取り出して，三つないし九つの心臓をもつ自分よりも強い相手を倒すというモチーフは一様に見られ，セルビア・クロアティア民衆叙事詩におけるモチーフと基本的に一致する。

ここではムサ・ケセジヤが王女誘拐者として登場するヴァリアントを取り上げたい。

≪ Кралевит Марко и Муса Кеседжия ≫ (БНТ, т. 1, с. 236-242).

ソフィアの町の居酒屋でマルコ王子が葡萄酒を飲み，居酒屋の女主人アンゲリナがお酌をする。マルコはムサとの戦いに出ようとしている。マルコはアンゲリナに愛馬シャルクーリヤに赤葡萄酒を飲ませ，白い小麦を食べさせるように頼む。マルコは，もし自分がムサに勝てば，ネックレスを 500本，金の指輪を1000個買ってやる，とアンゲリナに約束する。アンゲリナはマルコの馬に赤葡萄酒を飲ませ，白い小麦を食べさせたうえ，金のくつわをはめ，9本の腹帯を締めた。マルコは長剣を帯び，30頭の熊の毛皮からつくった半外套を羽織り，12匹の狼の毛皮でつくった帽子を被った。アンゲリナは葡萄酒のはいった水筒をマルコに与え，婚礼の際の介添え役となる人々に出会ったら水筒の葡萄酒を飲ませるように言う。マルコは帽子いっぱいの金貨を彼女に与え，ソフィアの町を出る。

広い野を渡り，暗い森にさしかかると，ひとりの若いラテン人〔カトリック教徒〕に出会う。若者はマルコに「マルコ王子よ，あなたは，ソフィアの町で

飲んだくれているが，皇帝がムサ・ケセジヤを討つよう，あなたを呼んでいるのをご存知ないか」と言う。マルコは若者に水筒の葡萄酒を飲ませ，自分はこれから皇帝の娘と結婚しに行くから，望むなら，自分と義兄弟になれ，と言う。若者は同意し，マルコに従って行く。

次にマルコは井戸のほとりで若い勇士ミハルチョに会う。ミハルチョもマルコに「あなたが酒場で飲み浮かれ，酒場の女たちの手に口づけし，ソフィアの町の娘たちをたぶらかしているあいだに，皇帝がムサを討つためにあなたをお呼びだ」と言う。マルコはミハルチョに水筒の葡萄酒を与え，自分と義兄弟になり，王女との結婚の介添え人になるように勧める。ミハルチョは同意し，マルコのお供をする。

さらにマルコは湖で沐浴しているアラビア人に会う。マルコは「お前の肌は水で洗ってもきれいにはならない。皮剥ぎ人のところへ行って生皮を剥いでもらえ」と悪口を浴びせる。アラビア人も，前の二人の若者と同じような科白でマルコに皇帝のお呼びがかかっていることを告げる。マルコはアラビア人にも水筒の葡萄酒を飲ませ，自分の義兄弟となり，王女との結婚の介添人になるように言う。黒いアラビア人は同意し，マルコに従う。

まもなくマルコは緑なす牧草地に出る。見ると一本の戦旗が地に突き立てられていて，勇士の馬がその旗に繋がれている。草の上には一人の強そうな勇士が寝そべっていて，そばに一人の娘がいて男にお酌をし，焼いた羊肉を食べさせている。マルコは大音声を張り上げて言う。— 「おい，よく聞け，ムサ・ケセジヤ／私は三人の勇士を連れてきた／二人は花嫁の介添え人，黒いのは父親代りだ／お前の妹を嫁にもらいたい／プリレップの町に連れて帰り／若い王妃とし／おふくろの手助けをさせるのだ」。ムサ・ケセジヤは起き上がり，黒毛の馬に跨がり，大声で叫んだ。— 「おい，いいか，マルコ王子／さあ，おれと一騎討ちだ／勝ったほうが娘を取るのだ」。

二人は三昼夜闘い，剣が折れ，短剣が折れ，鋼鉄の槍が折れた。ムサ・ケセジヤは言った。 ― 「マルコよ，ひと息つこうじゃないか／別の剣を取ろう／お前の忠実な義兄弟の／二人の介添人と黒い親代りの剣を借りよう」。

マルコが振り向くと，三人の義兄弟は逃げ失せていた。そこで二人は素手で組み討つことにし，三昼夜取っ組み合ったが，勝負がつかなかった。マルコが手で相手を摑むと，摑んだところの肉がもげ，ムサがマルコを摑むと，そこの骨が砕けた。マルコは立っていることができなくなり，緑の草の上に倒れた。マルコは大声で叫んで，妖精（ヴィーラ・サモディーヴァ）に助けを求めた。妖精は雲に乗って飛んできて，草地に降り立ち，そっとマルコに言う。 ― 「兄弟，マルコ王子よ，頑張って／左手でムサを支えて／右手をこちらに伸ばし／私の鋭い短剣を取りなさい／人でも龍でも殺せる剣だから」。マルコは妖精の短剣を取り，ムサの胸を切り裂いた。ムサは静かな声でマルコに「いいか，マルコ・クラレヴィティよ／おれの胸の中に何があるか，とくと見ろ」と言う。

マルコが見ると，ムサの胸の中には心臓が三つあった。一つの心臓はすでに止まっていた。二つ目の心臓は泡でおおわれていた。三つ目の心臓は生きているのか死んでいるのか様子がわからなかった。

マルコは立ち上がって，娘を馬に乗せ，ソフィアの町を目ざして進んだ。マルコは途中で三人の義兄弟に追いついた。マルコは駆け抜けざま，三人の腕を切り落し，目玉をくり抜いて，「おい，お前たち，三人の義兄弟／シシマン皇帝にこう伝えよ／マルコが美しい姫君を救い出して／プリレップの都に連れて行き／若い王妃にするのだ，と」。

マルコはソフィアの町に言って，アンゲリナに会い，彼女に「皇帝のもとへ行って／私からの挨拶をおくり／姫を嫁にくれるように頼んでくれ」と言う。アンゲリナはマルコの言いつけどおりにする。すると皇帝は彼女に言う。 ― 「私の娘はさらわれて囚われている／娘をさらったのはムサ・ケセジヤだ／そ

のムサは牧草地に座りこみ／私の娘はお酌をさせられている／あれからもう三週間にもなる／私はマルコ王子に／私の可愛い娘を奪い返してくれるよう頼んだ／だが，マルコはムサと闘おうとしない／それはムサが勇士の中の勇士だからだ」。アンゲリナは答えて言う。 ― 「いいえ，シシマン皇帝さま／お姫さまはマルコ王子のもとにおられます／マルコはムサ・ケセジヤを倒したのです」。それを聞いて皇帝は厩に駆けこみ，駿馬に鞍を置き，マルコ王子を出迎えた。皇帝はマルコの黒い目のあたりに口づけをし，ヴェリチカ姫をマルコのもとに嫁がせた。

この歌においては皇帝シシマンが登場し，マルコはブルガリア皇帝に臣従するプリレップの侯である。皇帝シシマンは中世ブルガリア帝国末期の皇帝イオアン・シシマン（1365－1393）の反映と思われるが，彼の王国の都はタルノヴォであって，ソフィアではない。この歌におけるソフィアはすでに叙事詩的な町となっている。

ムサ・ケセジヤはここでは女性略奪者とし登場しているが，スラヴ叙事詩においてこの役割を担うのは龍がふつうであり，ムサ・ケセジヤの形象と結びつくのは異例である。略奪された女性が皇帝シシマンの娘であることが判明するのは歌の後半においてである。

マルコの義兄弟となった三人の若い従者の役割は分りにくい。マルコは，結婚の介添え人となるように，三人に声をかけている。黒いアラビア人は“побащим”（父親代り），あとの二人は“девер”（花嫁の介添え人，義理の弟役）である。マルコはムサ・ケセジヤに「私は三人の勇士を連れてきた／二人の介添え人と黒い父親代りだ／お前の義理の妹（посестрима）をもらいにきた」と言う。スラヴ民衆英雄叙事詩においては戦闘はしばしば婚礼の宴の比喩をもって表現されるから，三人は決闘の立合い人でもある。マルコは決闘の

場（＝婚礼の宴席）から逃げ去った立合い人たち，不誠実な義兄弟たちの腕を切り落し，目をえぐり取る。

「義兄弟」，「義姉妹」はスラヴ叙事詩における重要な概念である。「義兄弟」はセルビア・クロアティア語でpóbratim,ブルガリア語でпобрáтим,ロシア語でпобрати́м,「義姉妹」はセルビア・クロアティア語でpòsestrima,ブルガリア語でпосéстрима(ロシア語では「義姉妹の関係」をпосестри́мство）と言う。叙事詩の英雄たちが何かの困難に遭遇した場合，男同士ならば義兄弟，男と女ならば義姉妹の契りを結ぶ。

セルビア・クロアティア叙事詩で義兄弟の契りは，ふつう次のような表現の定式をもって結ばれる。— “Da si mi po Bogu brat!”「神による兄弟となろう」あるいは“Bratimim te Bogom i svetim Jovanom!”「神と聖ヨハネとによって兄弟となろう」。義兄弟とはこのように神と聖ヨハネ（バプテスマのヨハネ）を証人として結ばれた擬制的な血縁関係であり，「神による兄弟」と呼ばれる間柄は互いに従順で誠実でなければならない。

このブルガリア叙事詩における三人の若者はマルコによって“мили побратиме”（「愛する義兄弟よ」）と呼びかけられ，皇帝のもとでの婚礼の席に招待されるが，義兄弟の概念からは遠いものであり，むしろ敵のイメージに近い存在である。とくに「黒いアラビア人」（この歌のテクストでは“черно харапче”，ふつうは“Черен Арапин”）とは14－15世紀の英雄叙事詩におけるトルコ人の集合的形象であり，南スラヴ民族に敵対するオスマン・トルコの力の擬人化である。マルコが最初に出会ったラテン人の若者（момче Латиненче, младо Латинче）もマルコの強敵の一人ラテン人ギノ Гино Латиник （Гине от Латина）を想わせる。叙事詩『マルコとラテン人ギノ』（《Марко и Гино Латиник》，БНТ, т. 1, с. 393-403）においてはラテン人ギノは正教に対立するカトリック勢力，西ヨーロッパ騎士団の集合

的形象である。マルコが狩に出た留守中にプリレップのマルコの館を盗賊ラテン人ギノの一味が襲撃して財産を略奪し，マルコの老いたる母を殺し，マルコの妻を女奴隷とし，使用人たちを奴隷とした。マルコは神に向って叫ぶ。

Защо пущаш проклети латинци,
та ни газат хрискянската вера
да се фалат, че хрискяне губат!
どうして，呪われたラテン人どもに
正教の信仰を踏みにじることを許し，
正教を殺して自慢することを許したもうのか！

マルコは正教の黒衣の修道僧に身をやつし，ラテン人ギノに近づいて仇を討つ。マルコが二番目に出会った若者ミハルチョ将軍（Михалчо войвода）の形象ははっきりしないが，その名はマルコの敵ラテン王ミハイル（Латински крал Михаил）あるいは勇敢なるワラキア王ミハイルを想起させる。マルコがこの三人を婚礼の介添え人としてムサ・ケセジヤとの決闘に立合せたのは，手のこんだユーモアとも考えられる。

この歌において英雄マルコの真の義姉妹の役割を演じているのは，居酒屋の娘アンゲリナと妖精ヴィーラ・サモディーヴァであることは明瞭である。

3　ムサ・ケセジヤと盗賊ソロヴェイ

南スラヴ民衆英雄叙事詩に登場するムサ・ケセジヤ（盗賊ムサ）はロシアのブィリーナ『イリヤー・ムーロメッツと盗賊ソロヴェイ』（《Илья Муромец и Соловей Разбойник》，Гильфердинг，№ 74）の盗賊ソロヴェイといく

つかの類似点をもつ。ムサ，ソロヴェイともに盗賊（kesedžija, разбойник）であるが，両者の略奪行為はある種の反国家的行為，反民族的運動の性格をもつ。ムサはオスマン・トルコのスルタン権力に抵抗し，ソロヴェイはキェフ大公の権力と国家秩序に対する反抗であるが，民族的抵抗の性格はなく，平和な国民生活を撹乱する行為にすぎない。ムサもソロヴェイも街道（商業路）を閉鎖してその地域全体と国の中央部との正常な連絡機関を分断し，暴虐をほしいままにする。

ブイリーナのソロヴェイの起源，歴史上対応し得る人物像は不明であるが，ムサのほうは、前述のごとく，歴史的な面でも情報が多い。スルタンの宮廷を去るムサの形象には中央権力を承認せず，自主独立を主張する典型的な封建領主の姿の反映が見られる。

盗賊ソロヴェイも盗賊ムサも叙事詩的怪物としての強さをもつ。

ソロヴェイは3本（あるいは7，12，40本）の樫の木（дуб）の上に巣をつくっている怪鳥で，鳥の鳴き声（птичий свист），蛇のような口笛（змеиный шип），野獣の咆哮（звериный крик）をもって人を殺す。

ムサは，ウェルギリウスの『アイネーイス』（第三歌）のエリュルスErylusと同じように，三個の心臓をもつ。しかし彼の怪物性は最後に判明するものの，その力は発揮されずに終る。

ムサ・ケセジヤに比して，盗賊ソロヴェイはより古代的な叙事詩的怪物のイメージを保っている。ソロヴェイは半人半鳥の姿で描かれる。ソロヴェイはチェルニゴフからキエフに至る鬱蒼たる森（「ブルィニの森」Брынские леса）aを住処とする。そこには「スモロディナ」河（речка Смородина, реченька Смородинка, река Самородина）が流れている。チェルニゴフはタタール侵入以前のキエフ公国の第二の都市，キエフの北方 130露里（約75マイル，140キロ），デスナ河畔に立つ。ブルィニの森はブィリーナでは Бранские,

Брианские (леса) などのヴァリアントであらわれ，昔のチェルニゴフ県の Брынь ，ヴォルイニ（ Волынь ）地方の Брыньскъ ，ジズドラ河（ Жиздра ）の支流 Брынь ，あるいはポーランドの河川名 Bryń, Breń, Brynica などと結びつくが，仮空の叙事詩的地名であろう。

дебрь (*Дъбрыни)「人跡未踏の密林」と関係づける語源説には無理があるとされてはいるが， Брынские леса は，口承文芸的連想としては，人を寄せつけぬ鬱蒼たる原始の森（ дремучий лес ）と結びつく。ソロヴェイはそのような人間を拒絶する森の主である。

閉鎖された場所を「鳥も通わず，人も通らぬ」と言う典型的共通表現はロシアのブイリーナにも南スラヴの叙事詩にも見られる[4]。

Там ни конницей никто ведь не проезживал,
Да й пехотой никто ведь не прохаживал,
Да й ни птица, черный ворон, не пролетывал,
Там ни пестрый зверь не просыскивал.

そこは馬で通った人もなく，
あるいて通った人もなく，
鳥も，黒い鴉も飛んだことがなく，
斑の獣も走ったことがない。

ブルガリア叙事詩『マルコ・クラレヴィチとムサ・ケセジヤ』のあるヴァリアントにおいて，ムサはマルコに言う。 —

Не чуваш ли, Марко, не видиш ли Марко,

Че не пущам по моето поле

Птиче да профръкни, не челяк да мине.

マルコよ，聞いたことはないか，マルコよ，見たことはないか，

私は自分の野を何者にも通させず，

鳥も飛ばず，人も通らぬ，ということを。

ソロヴェイは，また，スモロディナの河の渡し守である。スモロディナ河も叙事詩的な河であり，ロシアの口承文芸においては，悪臭を放つ（смрадная река），黒いタールの煮えたぎる河で，「この世」と「かの世」との境界をなす。昔話では火の河の関守は大蛇である。

Как засвищет Соловей по-соловьиному,

Закричит, собака, й по-звериному,

Зашипит, проклятый, по-змеиному—

Так все травушки-муравы уплетаются,

Все лазоревы цветочки осыпаются,

А что есть людей вблизи, так все мертвы лежат!

ソロヴェイがヨナキツグミのように鋭く鳴きはじめ，

犬めが，獣のように吼えはじめ，

呪われた蛇のように口笛を鳴らすと —

すべての草木はうちしおれ，

色あざやかな花はことごとく散りはて，

近くにいる人々はみな死人となって横たわる。

このように，ソロヴェイの形象はイリヤー・ムーロメッツのそれよりもはるかに古風であり，神話的表象に満ちている。

ブイリーナの優れた語り手の一人トロフィーム・リャビーニンの語りによれば（ Гильфердинг， № 74 ），故郷のムーロムの村を出たイリヤーはヴラジーミル公に仕えるためにキエフの都に向い，その途中チェルニゴフの町にさしかかる。チェルニゴフの人々は城門を開いて，イリヤーにチェルニゴフの軍司令官になってくれるように頼んだが，イリヤーはそれを断り，キエフに行く近道を訊く。チェルニゴフの人々は，キエフに至る近道が盗賊ソロヴェイによって閉鎖されていることを彼に話す。イリヤーはいっさい構わずキエフへの近道を行く。ソロヴェイの鋭い鳴声に草木はしおれ，花は散り，森は揺れ動き，勇士の馬はつまずく。しかしイリヤーは強弓をきりりと引き絞り，ソロヴェイの右眼を射貫いた。イリヤーはソロヴェイを馬の右側のあぶみに縛りつけ，捕虜としてキエフに連れて行く。広野でソロヴェイの三人の娘の夫たちがイリヤーに襲いかかるが，ソロヴェイは女婿たちに襲撃をやめさせ，イリヤーをソロヴェイの巣に招いてもてなすように命じる。しかしイリヤーは耳を貸さず，栄ある都を目ざして進む。イリヤーはヴラジーミル公の宮殿にはいり，公に挨拶する。ヴラジーミル公はイリヤーに素姓を尋ねる。イリヤーはチェルニゴフからキエフまでの近道を通ってきたことを話すが，公はイリヤーの話を信じようとしない。イリヤーは証拠に捕虜のソロヴェイをヴラジーミル公の前に引き出し，ソロヴェイに声を半分に押えて鳴くように命じる。ソロヴェイは鳴く前に酒を要求する。酒を一気に飲み干したソロヴェイがいつものように鳴くと，宮殿の丸屋根がふっとび，窓が壊れ，居合せた人々はみな死体となって横わった。ウラジーミル公は貂の毛皮外套にくるまって難を免れた。イリヤーはソロヴェイを広野に引き出して，その首を落す。

勇士イリヤー・ムーロメッツの最初の武勲は怪物退治であった。

龍退治に代表される英雄と怪物との闘争を主題とするいわゆる「幻想的歴史叙事詩」はスラヴ叙事詩の発達の最古の段階である。南スラヴ叙事詩『マルコ・クラリェヴィチとムサ・ケセジヤ』とロシアのブイリーナ『イリヤー・ムーロメッツと盗賊ソロヴェイ』は怪物退治という共通の幻想的歴史主題から多少とも歴史性をもつ主題へと向う英雄叙事詩の発達の段階の異なる諸相を示している。ふつうは幻想的歴史主題はロシアよりも南スラヴの叙事詩において多く見られるが，イリヤーとソロヴェイの戦いは，多くの点において，マルコとムサの戦いよりも幻想的歴史主題の古い特徴を示している。『イリヤー・ムーロメッツと盗賊ソロヴェイ』においては「聖なるロシア」の外敵であるタタールは，若干のヴァリアントを除いて，直接にはあらわれず，ソロヴェイはロシアの内なる敵である。そのようなソロヴェイの形象についてはさまざまの解釈が可能である。ソロヴェイは深い森の中に巣をもち，鳥のように盛んに繁殖する。彼は多くの娘たち，女婿たちと大家族を成して住む。彼は氏族あるいは種族の長の特徴をもつ。ソロヴェイがイリヤーの捕虜となり，キエフ公ヴラジーミルの前に引き出されたことを氏族制社会の崩壊と見る立場もある（ルィバコフ）。盗賊ソロヴェイの形象を，キエフ・ルーシを分断し，その首都のキエフを孤立化してルーシを細分化し，閉鎖性に追いこもうとする諸力の芸術的表現と取る考え方（プロップ）は最も広く受け容れられている。

しかしながら，このような解釈は，歴史的・社会的条件が異なる南スラヴ叙事詩のムサ・ケセジヤの形象にあてはめることはできない。ムサ・ケセジヤには，三つの心臓をもつ怪物性，女性略奪者としての龍の性格の痕跡に，古代神話の余韻が感じられるにすぎない。

『マルコ・クラリェヴィチとムサ・ケセジヤ』主題の南スラヴ叙事詩に先行するタイプの古代的スラヴ叙事詩として『イリヤー・ムーロメッツと盗賊ソロ

ヴェイ』のブイリーナがある。ムサ・ケセジヤのような具体的な歴史的・社会的特徴をもつ敵の形象に先行してソロヴェイのような半人半獣の怪物としての敵の形象がスラヴ叙事詩にあった，と想定することができるであろう[5]。

Ⅳ　攫われた妻の奪還 ― 『マルコ・クラリェヴィチとコストゥルのミナ』のタイプの民衆叙事詩

1　セルビア・クロアティア民衆叙事詩『マルコ・クラリェヴィチとコストゥルのミナ』

この主題の民衆叙事詩はダルマティアでは“ bugarištica ”（15音節詩型）のものが一つ，10音節詩型のものが二つ知られているが，内容的に最も優れているのは，ヴーク・カラジッチ本に収録されている19世紀の語り手不明のテクスト《 Marko Kraljević i Mina od Kostura 》（ Vuk Karadžić II, № 62 ）である。それは次のような粗筋をもつ。 ―

ある晩，マルコが母親と二人で夕食中に3通の書状が届く。1通はイスタンブールのスルタン・バヤズィト（ car Pojazet ）から，2通目はハンガリー王（ kralj Budimski ）から，3通目はシビニのヤンコ将軍（ Janko Sibinjanin ）から。イスタンブールからのものはアラビア遠征に参加せよとのスルタンの召集状。ブダからのものは婚礼への招待状。シビニからのものは息子の洗礼に立ち会って欲しいとの招請状。マルコは，どの招きに応じるべきか，老母に相談する。母は答えて言う。 ―「わが子よ，マルコ王子よ／婚礼には楽しむために行くもの，／洗礼には仕来りだから行くもの，／戦には

行かざるを得ないから行くものです。／そなたはスルタンの皇軍に参加しなさい。／息子よ，神は我らをお赦しくださるであろうが，／トルコ人たちは我らの立場を分かってはくれないから」。

マルコは母の意見に従い，戦争に行くことにするが，出発に際して，母に自分の留守中にコストゥラのミナの襲撃があるかも知れないからくれぐれも注意するように言う。マルコは忠僕ゴルバンを伴って，スルタンの軍に加わるべく旅に出る。旅の3日目の晩，マルコはプリレップの城が襲撃される夢を見る。

マルコがイスタンブールに到着すると，スルタンは大軍を率いてアラビア攻撃に赴き，44の海辺の町を陥落させたが，カラ・オカン（ Kara-Okan ）の町だけは3年かかっても攻め落とすことができなかった。マルコはアラビアの名将の首級をつぎつぎと挙げ，スルタンから数々の恩賞をもらうが，トルコの戦士たちに妬まれ，恩賞めあてに死者の首を切ってスルタンのもとに持参しているにすぎない，と中傷される。この中傷に怒ったマルコは「養父」スルタンに願い出て，“ Slava ”と呼ばれる昔からのセルビアの習慣である自分の守護聖人の日の祝いのために，暇を取る。スルタンはこの願を退けることができない。

マルコはスルタンの本営から遠く離れた森に天幕を張り，盟友アリル＝アガと酒を酌み交し，三日間守護聖人聖ゲオルギエの名の日の祝いをつづける。その間，アラビア兵は敵の本陣に「まだら馬に乗った恐るべき勇士」の姿がないのを知って猛攻撃を加えたため，スルタンは10万の兵を失った。スルタンの懇請により本陣に帰営したマルコは，アラビア兵の真っ只中に馬を乗り入れ，獅子奮迅の奮闘で敵をなぎ倒し，最後の敵の一隊を捕虜にしてスルタンの御前に引き立てた。しかしマルコも70か所に手傷を負った。スルタンは金貨千枚をマルコに取らせ，傷の手当てをするように命じ，万一のために二人の忠実な下僕を付き添わせた。

しかしマルコは医者を呼ぶかわりに，居酒屋を飲み歩き，心ゆくまで酒を飲んで傷を治した。そのとき，マルコのもとに悲報が届く。 — プリレップの城が襲撃され，老いた母は馬の蹄にかけられて殺され，貞節な妻は捕われて連れ去られたという。

マルコはスルタンから 300人の近衛兵（ヤニチャル）を傭兵としてもらい，彼らに半月の鎌と軽い鍬とを持たせて葡萄畑の日傭い農夫に見せかけてコストゥルの城に向わせ，城を取り囲んで酒を飲みながら，あとから行く自分の到着を待て，と命じる。

マルコは単身“聖山”（ Sveta gora ）に赴き，聖体を拝領して，多くの血を流したことを懺悔したあと，黒い僧服をまとい，黒い鬚を胸までのばし，頭には修道士帽をかぶった。そうして愛馬シャラッツを駆ってコストゥルに行く。

コストゥルの城ではミナがマルコの妻に給仕させて酒を飲んでいる。ミナはまだら馬を見て不審に思い，黒衣の修道士に，どうやってそのまだら馬を手に入れたか，と尋ねる。修道士は，自分はスルタンの軍に従ってアラビアの地にいたとき，クラリェヴィチ・マルコという名の馬鹿者が戦死したので，仕来りどおりに埋葬し，故人の形見としてその馬を贈られたのだ，と説明する。ミナは，マルコが死んでマルコの妻と正式に結婚できるようになったことを喜び，修道士に婚儀の司式を頼む。マルコは祈禱書を取り出し，婚儀を執り行い，ミナと他ならぬ自分の妻とを結婚させた。式につづいて婚礼の祝宴となった。ミナは修道士に謝礼をするため，盃に三杯分の金貨を妻に取りに行かせる。ミナの妻となったイェリツァは地下の宝庫に行き，元はマルコのものであった財宝の中から盃三杯分の金貨を取り，ついでに錆びた剣を持ってきて，「黒衣のお坊さま，これもお取りなさい，／クラリェヴィチ・マルコの形見です」と言って修道士に渡す。

マルコは剣を取り，手の中でためつすがめつ見ていたが，やがてミナに「殿さま，コストゥルのミナさま，／このおめでたい祝いの席で／修道士の舞いというやつをひとつご披露してよろしいでしょうか」と聞く。ミナは軽い気持で承知する。マルコは軽く跳び上がり，二，三回くるくる舞うと，高楼が土台から揺れ動いた。マルコは錆びた剣を抜き放ち，右から左に一閃すると，ミナの首を斬り落した。マルコが城外に向って号令すると， 300人の近衛兵がミナの城に攻め入り，火をかけた。マルコはミナの財宝を奪い，貞節な妻を伴い，プリレップへと帰って行った。

この叙事詩のコストゥルのミナの原型として，トルコ人の総督，アルバニアのバルシッチ家の侯など，想像できる歴史上の人物は何人かはいる。コストゥル（現在のギリシアの Kastoria ）はマルコ王の領地の南西に位置する町で，1380年から1382年にかけてマルコの軍隊に包囲されたことがあり（陥落はしなかったが），この歴史的事件が叙事詩に反映されている，と考えられる。Mina の名は Minja, Mihna, Nina のヴァリアントをもつ。

シビニのヤンコは，15世紀にトルコとの戦いで勲功を立てたハンガリーの勇将 Hunjadi Janoš （1387－1456）の反映と見られ，叙事詩の世界ではトルコに抵抗する英雄としてマルコの盟友であるが，歴史上の人物としては生きた時代が異なる。

スルタン・バヤズィトは「猛きアラビアの地に遠征するため」（Na Arabsku ljutu pokrajinu ）マルコに召集令状を送るが，これも歴史的背景は不明である。スルタン・バヤズィト２世の小アジアの Karamanija 攻撃を想定することもできるが，史的マルコが仕えた主君はバヤズィト１世である。また，バヤズィト１世の時代にオスマン帝国はタタール・モンゴル軍の攻撃を受けた。1402年チムール汗（ Timur ，帖木児）の率いる軍隊がアンカラ（旧称アンゴ

ラ）付近でトルコ軍を粉砕した。叙事詩中の Kara-Okan は Ankara を想像させるが，アンカラの戦いの時は史的マルコはもはや生存していない。

この歌に登場するマルコの妻イェリツァ（イェーラ） Jelica （ Jela ）はコストゥルのミナに奪われるが，修道士に変装した夫に気付き，剣を渡す「貞節な妻」（ vjerna ljuba）としてうたわれている。史的マルコの妻は，ギリシア北部を領したラドスラヴ・フラペン Radoslav Hlapen の娘イェレナ Jelena の娘で自堕落な女性であったとされる。16世紀後半の歴史家，ドゥブロヴニクのベネディクト修道会士マヴロ・オルビニ Mavro Orbini （ Orbin ）の記述（《 Il Regno degli Slavi》，1601）によれば，マルコ王の妻イェレナはスカダルの領主バルシャ・バルシチ（Balša Balšić ）と通じ，1380年にコストゥルの城を彼に明け渡した。マルコはトルコの援軍を得てコストゥルを攻めたが，攻略できなかった。マルコは城と妻とを同時に失うことになったが，その後ほどなくバルシャはイェレナを不貞のゆえをもって追放し，マルコが彼女を再び迎えいれた，と伝えられる。

この史実（と言ってもなかば伝説的）を反映してマルコの妻を「不貞の妻」として描く民衆叙事詩がマケドニア，ブルガリアにいくつか知られている。叙事詩のマルコの妻の名はブルガリア民衆叙事詩では Angelina であることが多い。

2 ブルガリア民衆叙事詩『マルコとラテン人ギノ』

ブルガリア民衆叙事詩においてはコストゥルのミナはコストゥルのベレБеле от Костура と呼ばれることが多い。ベレ Беле という名はスカダルの領主バルシャ Балша を連想させ，コストゥルのベレはマルコから城と妻を奪った歴史上の人物にいっそう近づいている。マルコが修道僧に変装して略奪者ベレ

を倒し，ベレに囚われていた自分の妻子を奮還するというテーマの叙事詩はセルビア・クロアティア語領域よりもブルガリア語・マケドニア語領域に多く，種々のヴァリアントがある。

略奪者はコストゥルのベレに代ってラテン人ギノになることがある。ラテン人ギノはマルコと同時代のアルバニアの公（デスポト）ギノに比定することもできるが，その形象は，すでに触れたように，西ヨーロッパの軍事力と政治力の叙事詩的擬人化であり，より普遍的な形象である。ここでは『マルコとラテン人ギノ』（《Марко и Гино Латиник》，БНТ，т．1，с．393-397）の粗筋を見ることにする。—

マルコは狩に出かけ，山や谷を駆けめぐり，緑の森を抜け，広野に出たとき，急に睡魔に襲われ，頭を垂れて，うとうとしはじめた。ほんの少しのあいだまどろんだだけなのに，多くの夢を見た。濃い霧が降りてきて，露がふりかかり，帽子を飛ばした。馬は驚き，マルコも目を覚ました。なにか急いで帰らなければならないような嫌な予感がして，プリレップへの近道を馬をとばして行く。

町はずれの修道院まで来たとき，一人の老人に出会う。二人は挨拶を交したのち，お互いに，どこから来てどこへ行くのか，と尋ねる。マルコは，シャルカ山〔マケドニア北東のシャーラ山 Šara を指すものと思われる〕からの帰りで，山や野を駆けめぐって狩をしたが獲物がなく，プリレップの町に帰るところだ，と答える。老人は，自分は遠い国から旅してきて，いくつもの町を通り，プリレップの町を通り，コソヴォ平原を越え，ヴォディンの町〔10世紀の西ブルガリア帝国の南西部，ドナウ河沿いの要塞。11世紀初頭，ビザンツ軍の猛攻撃を受けて陥落した〕を通ってきた，と言う。プリレップと聞いて，マルコが町の様子を尋ねると，老人は答える。—「プリレップの町に災いがあった。／昨夜，夜陰に乗じて／ラテン人ギノが襲撃し／プリレップの家畜商人たちを

襲って略奪し／マルコの館に押入り／マルコの老母を殺し／マルコの妻をとりこにし／マルコのしもべたちを奴隷にし／マルコのしもめたちを女奴隷にして連れ去った」。マルコは驚き，自分がマルコだ，と言い，どうすべきか，老人に訊く。老人は，神に祈れば，答が得られる，と答える。

マルコは駒を引き留め，神に声が届くほどに号泣し，涙が馬に降りそそぐ。マルコはまる3週間考えに考えて，策略を考えつく。

マルコは修道院に行き，修道士の服とマントをまとう。マルコはブルガリアの地を通って，神に憐みを乞い，コストゥルに向う。

マルコは抜身のよくしなうサーベルを輪形のパンのように輪状に曲げて，左の腋の下に隠し持って，馬に乗ってギノの館へ行く。

ギノの館の前には小川が流れていて，彼の女奴隷たちが羊毛を洗っている。マルコは彼女たちに近づき，主人は在宅か，と訊く。女奴隷たちは，主人は在宅で昼寝中，と答え，互いに視線を交し合う。彼女たちは，これは主人のマルコではないか，と内心思うが，確信はもてない。ギノの女奴隷たちは黒衣の修道士に，どうしてマルコの馬に乗っているのか，と訊き，マルコは自分たちの主人だった，と言う。修道士は，マルコは聖ドミートリイ修道院で2か月前に死に，蠟燭を上げて彼の供養をするようにと形見にその馬をもらったのだ，と話す。女奴隷たちはみな溜息をつき，涙を流し，亡きマルコを偲んだ。

一人の女奴隷が立って，マルコをギノの部屋に案内し，ドアをノックするように言う。

修道士はドアをノックし，神は望みのものを何でも与える，と大きな声で言う。ギノは出てきて，修道士を見るが，マルコであることを見抜けない。ラテン人ギノは言う。 ― 「きちがい犬め，どこから来やがった／おれは神も悪魔もこわくはない／このおれ様がラテンのギノだ／星占いのギノ様とはこのおれのことだ／星という星はおれ様の命令どおりに動くのだ」。「でかい口たたく

な，ギノ，神様を怒らせるな／寝ぼけて，何が何だか分からんのだな／神様を相手にすることはできないのだぞ」と言って，修道士は，マルコの老いた母を殺したギノの罪の赦しを乞う祈りのために頭を下げ，左の腋の下から祈禱書を取り出すような振りをして，輪状に曲げたサーベルを取り；ギノの首を斬り落した。落ちた首は3度うち震えて，「黒犬め，だましやがったな！」と言った。

マルコは修道士服を脱ぎすて，修道士の鬚を切り，修道士帽を取った。マルコは奴隷を解放し，まだら馬にうち跨り，ギノの妻と侍女たちをとりこにしてプリレップに向った。

マルコは歌をうたい，母の冥福を祈った。「ああ神よ，いつくしみ深き神よ／わが犯しし罪を赦したまえ！／孤児となりしは悲しきかな！」。

この歌では，ギノに攫われたマルコの妻はその存在の影がきわめて薄い。ラテン人ギノによるプリレップ襲撃の目撃者である老人は「マルコの妻はとりことなって攫われた」（ Марку либе робиня заробил ）と言っている。しかしマルコの妻とはっきり分かる女性は登場しない。川で羊毛を洗っていた女奴隷のうち「一人のラテンの女奴隷が立って／彼をギノの部屋のところまで案内し／“ドアをノックしなさい，そうすれば彼が出てきます”と言う」（Па станала Латина робиня, / отвела го код Гинова стая: / Чукай тука, он ще да излезе. — ）　— この女性が，おそらく，マルコの妻であろう。また，マルコは女奴隷たちを解放した（Тогай Марко робини отробил ）が，妻を奪還したことは明言されていない。マルコは「ギノの妻をとりこにして連れ去った」（в плен закара Гиновото либе）が，ギノの妻は攫われたマルコの妻であり得る。マルコのラテン人ギノ殺害の主要な動機は母の仇討ちであり，そのことは歌の最後のマルコの祈りによく表されている。先に観たセルビア・クロアティア叙事詩『マルコ・クラリェヴィ

チとコストゥルのミナ』におけるマルコの妻のように，一定の明確な役割をもった人物としてのマルコの妻は，このブルガリア叙事詩には登場しない。そのことによってマルコの妻が略奪者側に通じた「不貞の妻」であることが暗示されている，と見ることもできよう。

この主題のブルガリア叙事詩において，多くの場合，マルコが狩に出かけた留守中に，彼のプリレップの城が敵に襲撃される。この歌にもあらわれているように，時ならぬ時に英雄が睡魔に襲われ，少しまどろむ間に悪い夢を見るというのは，禍事の発生を知らせるスラヴ民衆叙事詩の常套形式である。セルビア・クロアティア叙事詩『マルコ・クラリェヴィチとコストゥルのミナ』においても同様で，三日目の旅の晩，マルコは夕食中突然睡魔に襲われて盃を取り落し，少しまどろむ間にプリレップの館が襲撃される夢を見る。そのとき「盃は落ちたが，葡萄酒はこぼれなかった」（Časa pade, vino se ne prosu）と表現されているが，これも，正夢の時は盃を取り落しても盃は砕けず，中の酒もこぼれないという民間信仰に基づいた叙事詩的表現である。

ブルガリア民衆叙事詩には，セルビア・クロアティア民衆叙事詩におけるような，敵のプリレップ攻撃がスルタン軍の一将としてのマルコの従軍中に起るという設定は見られない。

勇士が修道士や巡礼に変装して敵を倒すというモチーフはスラヴ民衆叙事詩にはめずらしいものではなく，ロシアのブイリーナではイリヤー・ムーロメッツが巡礼姿でイードリシチェを倒し，アリョーシャ・ポポーヴィチが同じく巡礼に変装してドゥガーリン・ズメイェヴィチを殺す話が想起される。しかしブイリーナにはこの策略のモチーフが誘拐された妻の奪還のモチーフと結びついた例はない。

ロシアのブイリーナにおいて「攫われた不貞の妻の奪還」が主題となってい

る歌に『ミハイロ・ポトゥイク』（《Михайло Потык　》，Гильфердинг，1，№ 39　）がある。

ミハイロ・ポトゥイクは広野で狩をしているとき，黄金の角をもつ鹿に変身した美しい娘「白鳥姫」マリヤと出会い，結婚する。異国から40人の王と40人の王子から成る略奪者集団が来て，「白鳥姫」マリヤの引き渡しをヴラジーミル公に要求する。ミハイロは二度妻を奪われる。妻は一度は死者の国へ攫われるがミハイロは奪還に成功する。二度目は異国の王の城へ攫われる。ミハイロは妻奪還の旅に出るが，妻の裏切りに会い，奪還できない。妻は三度夫を欺き，最後は毒入りの酒を飲ませて三年のあいだ石に変えてしまう。三年後ミハイロは三人の巡礼の力を借りて眠りから覚め，異国の王女の教えに従い，緑酒の盃を投げ捨て，不貞の妻を大地に帰らせる。

このブイリーナにおいてミハイロは最後の瞬間まで妻の変節を知らず，妻に対して誠実である。マリヤは不貞の妻であるばかりでなく妖術師である。結局，マリヤは異界の人であり，夫を死者の国へいざなうのである。

V　不死身の英雄の死 ― 『マルコ・クラリェヴィチの死』の歌

1　英雄の力の限界 ― ブルガリア民族叙事詩 『マルコ王，その力を失う』

オスマン・トルコの軛のもとに呻吟した南スラヴ民族が夢想した理想の英雄像は，虐げられた人々の庇護者であった。天下無敵，赫々たる戦果，輝しい武勲に自ら酔い，その胸のうちに傲慢が頭をもたげたとき，不死身の英雄の力に翳りが見えはじめた。

ブルガリア民衆叙事詩『マルコ王その力を失う』（《 Крали Марко изгубва силата си 》，БНТ，т．1，с．413-420 ）において，虐げられた人々の庇護者たるべき英雄の本来の任務から逸脱したマルコはその無限の力を失う。

世界の果々を経巡り，向うところ敵なしと知ったマルコは宵の明星に，世界のうちに自分のような勇士はいるか，と問う。宵の明星は「お前のような勇士はいない／昔もいなかったし，今後もいないだろう」と答える。そのとき英雄マルコの知性が曇った。 ―

Бог да биет Марка Прилепчанец,
що ми рече дума неразумна,
що си стори пуста будалщина,
та погубн своя юнащина;
プリレップのマルコに神罰あれ，
思慮なき言葉を口に出し，
虚しき無謀をしでかして

おのが英雄精神を滅ぼした —

そしてマルコ・クラリェヴィチは言う。 —

—Ой та тебе, звездо Вечернице,
уще мене юнак не познаваш.
Слушай мене, звездо Вечернице!
Да ми слезит господ от небеси,
и со него на мейдан излегвам.
Край да имат майка църна земя,
с една ръка нея ке подкренам!—
ああ，星よ，宵の明星よ，
お前は勇士である私を見そこなっている
いいか，よく聞け，宵の明星よ
もし主なる神が天から降りてこられたら
私は神と一騎討ちをいどもう
母なる大地の端を摑むことができたら，
片手で大地を持ち上げてみせよう！

宵の明星はこの勇士の言葉を聞いてなにも答えず，ただ顔を曇らせた。空に霞がかかり，黒雲が走り，宵の明星の悲しみの涙が黒雲をつき抜け，冷たい露となって地に落ちた。マルコは駒を進めたが，なぜか騎行が辛くなり，馬は堅い岩場を走り，疲れた。マルコは手綱を引き締め，棍棒で打って馬を駆り立てた。シャレッツは猛り狂い，暴れまわった。地はうち震え，うめき，嵐が吹き荒れ，河と湖は波立ち騒ぎ，海は波さか巻き，海鳴りがとどろき，山は裂け

た。町に住む人々は恐れおののき，獣は驚いて深い穴に隠れ，小鳥たちは鳴き，さけび，その声が天地の主の耳にとどいた。主はそのような力に耐えきれぬ地を憐み，天よりくだった。

主なる神は貧しい老人の姿をとり，小さな袋を持ち，その袋に土をいっぱい詰めた。主が袋を二度祝福すると，袋の重さは母なる大地とちょうど同じ重さになった。老人はマルコが通るはずの十字路に腰をおろした。

マルコは山から山へと馬をとばした。彼の前には霧と埃がうず巻き，彼の後ろには馬が蹄で打ち飛ばした石が霰となって降った。勇士の馬が息を吐くと鼻孔から炎が吹き出し，口から出る白い泡が赤い血と混じり合った。ふとマルコが見ると，野に白い道が走り，ひとりの老人が小さな袋を背負ってとぼとぼと歩いている。老人は十字路にさしかかると，ひと息つくために腰をおろした。マルコは老人に近づいて挨拶し，どうしてそんな小さな袋をかついで，こんな地の果をさまよい歩いているのか，と尋ねる。老人は，自分はこの小さいが重い袋をかついで地の隅々まで歩いてきたが，もはや袋を持ち上げる力がないから，袋を持ち上げて背負わせてくれ，と頼む。

マルコは小さな袋を見て笑い，槍を突き出し，穂先にひっかけて持ち上げようとしたが，袋は動かなかった。次に，槍を両手で支えて持ち上げようとしたら，槍が二つに折れた。マルコはわが目を疑った。彼は愛馬シャレッツをとばして駆け寄りざま，右手を伸ばして小指だけで袋を摑み，ぐいと上へ引っ張り上げたとき，勇士の馬はあえぎ，最後の力をふりしぼって言った。 ― 「ああ，ご主人，マルコ・クラリェヴィチさま／あなたは私の骨をことごとく砕き／私の強い血管をことごとく破り／私のすべての力を滅ぼしてしまわれた」。マルコが見ると，馬は膝まで大地にめりこんでいるのに，袋は微動だにしない。マルコは腹を立て，馬からとび降りて，右足で力いっぱい小袋を蹴っとばしたが，足が痛んだだけで袋はびくとも動かない。マルコはますます腹を立て両手で袋

を摑み，力いっぱい持ち上げようとした。彼の足は堅い岩場にめりこみ，血の汗が顔から流れ，ふんばったため目玉がとび出し，歯をくいしばったため口が切れて血だらけになった。マルコは力をふりしぼって袋を持ち上げた。袋は地面から二指尺〔指尺 педя は親指と人差指を張った長さ〕ほど持ち上がった。勇士の骨という骨はぎしぎしと音を立て，心臓の中で何かが破裂し，マルコは全身を痙攣させて袋をほうり出し，倒れた。自分を見ると，膝まで岩場の地にめりこんでいた。

そのとき老人はマルコに言った。 — 「さて，マルコ・クラリェヴィチよ／お前は，それが何の重さであるか，分かるか」。マルコは老人に説明を求めた。老人は，「お前は大地を持ち上げたのだ／天地万物の主である／私と闘うだけの／勇士の力はまだ残っているか」と言う。マルコは自分の愚さをさとり，非を詫びる。老人はつづけて言う。 — 「マルコ・クラリェヴィチよ／お前が槍で袋を持ち上げようとしたとき／お前は自分の力の半分を失ったのだ／指で袋を引き上げようとしたとき／残りの半分の半分を失った／両手で大地を持ち上げようとしたとき／そのまた半分を失った／そして袋を少し持ち上げたとき／お前は残った力をすべて失ったのだ／私はお前に祝福を与えよう／お前は再び勇士のうちの勇士となるだろう／しかし，もしお前より強い勇士がいたとしたら／見知らぬ敵に／勇士としての力だけで勝つことはできない／これからは策略とだまし討ちで／相手を倒すことになるのだ」。このように話すと老人の姿は消えた。

マルコは失われた力と勇猛さを惜しみつつ悄然としてプリレップに帰った。マルコは自分の王国と国境を守った。その後マルコ・クラリェヴィチは策略とだまし討ちで戦うようになった。

この歌のテクストはマケドニア南部の町レセンResenの出身者の伝承に基づ

いている。歌の中心を成しているのは，大地の重さがはいった袋と英雄の格闘のモチーフであり，このモチーフはロシアのブイリーナにも見られる。天地の創造主が登場するが，宗教性はここでは副次的なものにすぎない。このマルコの怪力喪失の歌と剛力無双の勇士スヴャトゴールと不思議な袋との出合いを主題としたロシアのブイリーナとの類似性は明瞭である。

『スヴャトゴールと大地の重さ』（《 Свя тогор и тяга земная 》，Рыбников，т．1，№ 86，с．453–454）は『イリヤー・ムーロメッツとスヴャトゴール』のブイリーナのヴァリアントの一つであるが，カレリア地方（キージ島）の農婦ドミートリエヴァが歌の形ではなく，話の形で語ったもので，テクストは簡潔である。 —

スヴャトゴールは広野に遊ぶ支度をし，愛馬に鞍を置き，広き野を馬に乗って行く。スヴャトゴールと力で張り合える者は誰もいない。血管には力が隆々とみなぎる。その怪力は重い荷のようにずしりと重い。そこでスヴャトゴールは言う。 —「もし地の重心に取っ手があれば，大地全体を持ち上げてみせよう」。

スヴャトゴールは曠野の中で小さな振り分け荷袋を見つけた。彼は鞭を取って小袋に触れてみたが，傾きもしない。指で押してみたが，揺がない。馬上から手で摑んだが，持ち上がらない。「私は長年世界を経巡ってきたが，こんな不思議なものに出合ったためしがない。こんな奇蹟は見たことがない。こんな小さな振り分け荷袋が傾きもしなければ，揺ぎもせず，持ち上がりもしないとは」。

スヴャトゴールは馬を降り，両手で袋を摑んだ。膝より高く持ち上げると，スヴャトゴールは膝まで地にめりこんだ。白い顔に流れたのは汗ではなく，血であった。スヴャトゴールははまりこんだ場所で動きがとれず，そこで最後を

迎えることになった。

スヴャトゴールとマルコの二人の英雄の力自慢の言葉は，スラヴ叙事詩の典型的共通表現として注目に価する。

Как бы я тяги нашел,
Так я бы всю землю поднял!

もし摑むところが見つかれば
大地ごと持ち上げてみせよう

Край да имат майка църна земя,
с една ръка нея ке подкренам!

もし母なる黒き大地に端があるなら
片手で大地を持ち上げてみせよう！

スヴャトゴールにとっても，マルコにとっても，この力自慢が命取りとなる。しかしブルガリア叙事詩においてはマルコの力自慢は神に挑戦する傲慢（ヒュブリス）として倫理的に厳しく非難されているが，ロシアの伝承においてはその側面の表現は明確ではない。

大地の重力に挑む神秘の力のモチーフにおいてスヴャトゴールは冥界的な存在を想わせる。ブルガリア叙事詩『マルコ王その力を失う』とロシアのブイリーナ『イリヤー・ムーロメッツとスヴャトゴール』は同一起源のスラヴ口承叙事詩であり，新しい英雄マルコがスヴャトゴール型の古代的タイプの英雄の形

象を受け継いだ，と考えてよいであろう。

2　ブルガリア民衆叙事詩『マルコの死とブルガリア帝国の滅亡』

『マルコの死とブルガリア帝国の滅亡』（《Маркова смърт и погинване на царството》，БНТ，т．1，с．536-540）は中部ブルガリアのコプリフシュティツァ〔1875年4月，民族解放運動の狼煙が上がった有名な村〕で採録されたテクスト（語り手ペタル・サルチョフ　Петър Салчов，採録者ストレゾフ　Ст．К．Стрезов）。この種の作品は時代的に後期に属し，既に形成されていた「マルコ歌圏」の言わば掉尾を飾るものである。梗概は次のごとくである。

マルコはアナトリアに向ってトルコのイェニチェリ軍団討伐のために馬を進めていた。敵に遭遇すれば戦い，いたるところで勝利をおさめた。ブルガリア人マルコは白き海の岸辺に出る。身体を横たえると，悪い夢を見た。— 天空が裂けて，空の星がことごとく地に落ちた。マルコは不安に駆られ，愛馬シャルカを飛ばしてまっすぐプリレップに帰る。

マルコが母に不吉な夢の話をすると，母は涙ながらに夢の解きあかしをする。— マルコが遠征に出て留守のあいだに，トルコ軍がブルガリアの地を制圧し，ブルガリアの勇士たちはトルコに鍵を渡してしまった。「トルコ人たちがお前を捜しまわって／プリレップの城門の鍵を渡たさせようとしている」。

母の話を聞くやマルコは敵を迎え撃つべくコソヴォ平原へと馬を走らせる。あとを追ってきた母を振り返りもせず，マルコはカチャニク峡谷沿いの山道を登って行く。そこでマルコは三人のトルコ人に出くわす。マルコが彼らに，どこに急ぐのか，と訊くと，彼らは答えて，ブルガリアのすべての勇士は降伏し

たのにプリレップのマルコだけは降伏しようとしないので，マルコを捜しに行くところだ，もしマルコが降伏しなかったら，その首を刎ね，若き王妃を捕えてアナトリアに連れ去るのだ，と言う。マルコは，自分がプリレップのマルコだ，と名乗り，自分とシャルコが生きているかぎり降伏はしない，と言って，三人のトルコ人を斬り殺す。

マルコはカチャニク峡谷の山道を登り，コソヴォ平原を見下ろし，そこに雲霞のごときトルコの大軍がひしめいているのを見る。マルコは敵軍の数の多さには驚かなかったが，どんなに目を凝らしても，ブルガリア軍の軍旗は見えなかった。マルコは怒りに駆られて天馬シャルコに拍車をかけ，単身剣を振りかざして敵陣に突入し，三日三晩トルコ人を斬り倒した。シャルコは黒ずんだトルコ人の血の海に膝までつかった。

そのとき，聖イリヤが白い衣を着た三人の天使とともに現れた。聖イリヤは静かに言った。 — 「さあ，ブルガリア人マルコよ！／馬を引き留め，剣を収めよ／ブルガリアの地はすでにトルコ軍の手に落ちた／プリレップもトルコ人の支配するところとなろう」。マルコは身震いし，幻覚から醒めたが，これが真実とは信じられず，再びトルコ人たちに斬りかかっていったが，手を振り上げようとしても手が震えて言うことをきかず，敵を斬ることができなかった。そこでマルコはこれを天の定めと知って，馬を引き返してプリレップの町へと走った。

若き王妃が迎えに出た。マルコは妻に尋ねた。 — 「ああ，わが愛する妻よ／剣にかかって死ぬことを望むか／それともトルコ人の手におちて／囚われの身となってアナトリアに連れて行かれ／トルコ人の愛妾となるほうがいいか」。妻は，トルコ人の女奴隷となるよりは剣にかかって死ぬほうがまし，と答える。

マルコは剣を振って哀れな妻の首を落とし，つづいて愛する息子ボグダンと老いた母を斬った。マルコは再び剣を振ってシャルコを斬った — それは彼ら

がトルコ人の手に落ちないためであった。

そしてマルコは姿を消し，その行方は杳としてわからない。

マルコがイェニチェリ軍団を討つためにアナトリア（歌のテクストでは Анадол ）に遠征したというのは，語り手の愛国心から出た空想である。語り手は，また，マルコを“ブルガリア人”と規定し，コソヴォ平原をブルガリアの一部と見なし，そこでブルガリア軍とトルコ軍とが戦った，と考えているが，このような見方は他のブルガリア叙事詩にも見られる。セルビア叙事詩のコソヴォ主題の歌群を知っている民衆詩人たちのあいだで広まったものであろう。

語り手は，マルコがどこかの洞窟に身を隠していて，トルコの軛を断つ機をうかがっているという伝説を知っているものと思われ，マルコの死を明言しないことによって，聞き手に希望をもたせている。

3　セルビア・クロアティア民衆叙事詩『マルコ・クラリェヴィチの死』

セルビア・クロアティア民衆叙事詩にいてもマルコ・クラリェヴィチの死を主題にした歌がいくつかあるが，ここではスレーム地方の有名な盲目の語り手フィリップ・ヴィシニチ Filip Višnjić の語りによる（1815年採録）『マルコ・クラリェヴィチの死』（《 Smrt Marka Kraljevića 》， Vuk Karadžic, т. II, № 73）を取り上げる。

ある日曜日の朝早く，マルコ・クラリェヴィチは海辺に近いウルヴィナ山を目差して行く。山道にさしかかると，愛馬シャラッツが突然躓き，涙を流しはじめた。マルコは， 160年間自分のよい相棒であったシャラッツが，かつてな

かったことに，躓き，涙さえ流しているのを，訝る。そのとき，妖精がウルヴィナ山の頂からマルコに呼びかけて言う。「兄弟，マルコ王子よ／なぜ，あなたの馬が躓くか，知っているか／シャラッツは主人であるあなたの身を思い悲しんでいるのだ／あなたたちはじきに別れる定めにあるからだ」。マルコは，自分とシャラッツとはともに東から西まで全国津々浦々をめぐってきた仲であり，それにシャラッツに勝る名馬なく，自分に勝る乗り手はないのに，どうしてシャラッツと別れることができようか，と反論する。「しかしマルコよ，痛ましきかな／あなたは老いたる刑吏，神によって死を定められた」と妖精は言う。妖精は，山の頂上から見える森の中のどの木よりも高い二本の針樅の木のあいだに井戸があり，その井戸を覗けば自分の死期がわかるだろう，と告げる。マルコは妖精の言葉に従い，山頂から見まわすと，最も高い二本の針樅を見つけた。

マルコはシャラッツの向きを変えてそこに行き，馬を樅の木に繋いで，井戸を覗いて自分の顔を映して見た。マルコは水に映った自分の顔を見て，自分の死が近いことを悟った。マルコは腰の剣を抜き，愛馬シャラッツに近づくや，その首を斬り落した。シャラッツがトルコ人の手に渡り，酷使されたり，水運びをさせられたりしないように。マルコはシャラッツを斬ると，シャラッツを弟のアンドリヤよりも手厚く葬った。

マルコは自分の鋭い剣を四つに折った。彼の剣がトルコ人の手に渡って，トルコ人が，マルコの剣だ，と自慢しないように，マルコの剣によってキリスト教徒に災いがふりかからないように。マルコはさらに槍を七つに折って樅の梢のあいだに投げ，それから六枚羽根のついた槌矛を右手に取り，ウルヴィナ山から碧く深い海へほうり投げた。マルコは槌矛に向って言った。 ― 「わが槌矛海面に浮かび上がるとき／われのごとき勇士，再び世に生れよ！」。

マルコは武器を始末すると，矢立てと紙を取り出して遺言を書いた。 ―

「ウルヴィナの山頂に来たりて／二本の針樅のあいだの冷たき井戸のほとりに／マルコの横たわるを見し者は／マルコ死す，と知れ。／マルコは財宝をおさめし三つの財布を所持す。／財宝は，すべてこれ輝く金貨なり。／一つは，我を埋葬する者に与う，／一つは，教会を飾るために用うべし，／一つは，足萎えの者と盲の者に与えよ，／盲の者，世を歩き／マルコを偲びて歌い語らん」。

マルコは遺書を道からよく見える針樅の枝に吊した。黄金の矢立てを井戸に投げこみ，緑色の上着をぬいで針樅の樹陰の草の上に敷き，十字を切って座った。貂の毛皮帽を目深にかぶり，身を横たえ，再び起き上がることはなかった。

マルコが井戸のほとりで死んでから一週間経った。街道を往き来する者は，マルコ・クラリェヴィチを見て，眠っているものと思い，眠りを妨げるのを恐れて遠まわりをした。

寝せる神あれば起こす神ありで，ある日運よく聖山のヴィリンダル修道院の院長ヴァシリエが，輔祭のイサイヤを連れて通りかかる。二人がマルコを起さないようにそっと近づき，木の枝に吊してある遺言書を見て，マルコの死を知る。ヴァシリエ院長はマルコを不憫に思い，涙を流し，埋葬の方法を考える。院長はマルコの遺体を自分の馬に乗せて海まで運び，船に乗せて聖山へと伴った。ヴィリンダル修道院の教会に遺体を安置して葬儀を行い，亡き勇士の魂の安息を祈った。

老僧はマルコの亡骸を埋葬したが，墓碑は建てなかった。マルコの墓の所在が分からぬよう，悪者がマルコの亡骸に復讐することがないように。

この歌においてはマルコ・クラリェヴィチはウルヴィナ山 Urvina で死を迎えるが，実際にはそのような山はない。《 urvina 》はセルビア・クロアティア語で“断崖，絶壁”を意味する普通名詞であるが，マルコが戦死を遂げたワラキアの Rovine の訛とも考えられる。

古代スラヴ人のあいだでは武人が死ぬとその馬を殺し，武器を折る風習があった。そうすれば，死んだ主人は愛馬と愛用した武器とともに彼の世に行く，と信じられたからである。しかしこの歌においては，前述のブルガリア叙事詩におけると同様に，この古代の習慣が再解釈され，新しい意味が付加されている。

また，「マルコはシャラッツを斬ると／シャラッツを埋葬した／弟アンドリヤよりも手厚く」（ A kad Marko posiječe Šarca, / Šarca konja svoga ukopao, / bolje Šarca neg' brata Andriju; ）と歌われているところから，語り手はマルコ王子の弟アンドリヤシュの死を主題とする歌を知っていたものと思われる。

この歌においてはマルコ・クラリェヴィチの亡骸は海のかなたの“聖山” Svetogorac, Sveta gora に移される。“聖山”は南スラヴの口承文芸においては，ふつう，東方正教会の修道院群を擁するギリシアのアトス山を指す。アトス山にあるヒランダル Hilandar 修道院は1189年に聖サヴァとその父ステファン・ネマーニャによって建立されたセルビア正教会の修道院である。しかし，この歌においては Hilandar は Vilindar となっていて，vilin dar “ヴィーラの贈物”という意味の仮空の僧院となっている。

史的マルコの墓はスコピエの南方のマルコ修道院内にあるという。

注

（1） Konstantin Filosof はブルガリア人で（生れは，おそらく，キュステンディル）非常に学識の高い人物。故国を去ってセルビアに行き，コソヴォの戦い（1389年）で戦死した Lazar公の息子の Despot Stefan Lazarević（1389－1427）の宮廷に仕え，そこで学者として活躍し，とくに文学教育，著作活動の領域において重要な役割を演じた。古写本の校訂のための理論体系を

打ち出し，正書法を改正した。ステファン公時代の中世セルビア文学の水準の高さはコンスタンティンの働きに負うところが大きい。『ステファン・ラザーレヴィチ公の生涯』《 Žitije despota Stefana Lazarevića 》は，公の死後まもない1431年ごろに書かれたもので，南スラヴの歴史の重要な資料である。

テクストとしては次のものを参照。

1. Lebensbeschreibung des Despoten Stefan Lazarević von Konstantin dem Philosophen im Auszug herausgegeben und übersetzt von Maximilian Braun. Wiesbaden (Otto Harrassowitz), 1956.
2. Bogdanović, D. Stare srbske biografije. Beograd (Prosveta), 1975, s. 229-248.

(2) Арнаудов, М. Очерки по българския фолклор. София, 1934, с. 296-298.

(3)“ bugarštica ”という名称は，アドリア海沿岸地方で“哀歌をうたう”を意味する bugariti から造語されたもの，とふつう考えられている。いろいろな語源説，起源説がある。イタリア語 bucculare（嘆く）に起源するとする説（ Daničić ），poesia latina と区別した意味の poesia vulgare （民衆詩歌）から生じたとする説（ Petrovski ），楽器 bugarija （マンドリンの一種）の伴奏によって歌われたことから出たとする説（ Bogišić ）などが主なものである。ブガルシュティツァは元来はダルマティア地方の民衆叙情詩の形式であったものが英雄叙事詩に適用されたものである（ Jagić ）。

(4) Смирнов, Ю. И. Славянские эпические традиции. М., 1974. стр. 67-68.

(5) Путилов, Б. Н. Русский и южнославянский героический эпос. М., 1971, стр. 62-70.

テクスト

1 Stojković, S. J. Kraljević Marko. Novi Sad. 1922.

2 Vuk Karadžić. Srpske narodne pjesme. knj. II. Dela Vuka Karadžića. Beograd. 1985. [Vuk Karadžić と略記]

3 Българско народно творчество. т. 1. Юнашки песни. София, 1961. [БНТ と略記]

4 Българска народна поезия и проза. т. 1. Юнашки песни. Съставителство и редакции Лиляна Богданова. София. 1981.

5 Былины. «Библиотека поэта» Большая серия. Изд. з-е. Л., 1986.